
夢の終わり ~ A f t e r S t o r y ~

飛燕

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夢の終わり～After Story～

【Nコード】

N4754C

【作者名】

飛燕

【あらすじ】

『夢の終わり』から約一ヶ月、和泉沙苗の提案で肝試しに行く事になった四人。そこで北斗は再び夢をみた。

夢の終わり～After Story～

前編：地蔵（前書き）

あらすじにもありますが『夢の終わり』のその後です。ですので、前作を知らない方が読んでも意味不明に……。是非『夢の終わり』を読んでからご覧下さい。<http://ncode.syosetu.com/n3748a/>

前編：地蔵

草木も眠る丑三つ時、荒れ果てた森の中に二人の少年の姿があった。

「ホクト、お前は一回死んでいる」

その内の一人、芥川大地あくたがわだいちが躍動感のない声を発した。それを聞いて一瞬固まった瀧本北斗たきもとほくとだったが、すぐにいつもの冗談か、と笑いながら大地に視線を返した。

しかし、大地の目が至って真剣なのを認識すると、それに合わせる様に真面目な顔を作る。

「大地はボクの知らない何か知ってるんだね？ 教えてよ」

「じゃあ目を瞑れ」

「目？」

「お前にとって大切な事を思い出させてやる」
不思議そうに目を閉じる北斗の目を覆うように、掌を近付けていった。

夢の終わり～After Story～

「ねえねえ、今度の土曜、肝試しに行こうよ」

夏休みを目前に控えた昇華高校の教室に、和泉沙苗いずみさなえの無邪気な声が弾んだ。

「ん？」

「あ、サナちゃん」

最後尾の窓際の机に突っ伏していた北斗と、その前の席に腰掛けていた水野真帆みづのまほが沙苗に目をやる。

「相変わらずのほほんとしてるね」。で、土曜日は空いてる？」

「肝試しだっけ？ 急にどうしたの？」

「真帆にとっては急かもしれないけど、ホクトには話してあるよ。ね？」

「え？ そうなの？」

「ん？」

依然寝呆けた顔で腕を組む。それを数秒続けると、あ……、と小さく声を漏らし、笑顔で沙苗に向き直る。

「ん、そうだったね。土曜日だったら行けるよ」

「オツケ。真帆は？ 行かないって言うなら、ホクトは私が」
「行きます」

「あ、でもたまには恋人同士が別々に過ごす休日っていうのもいいかもよ？ ほら、私がいる」

「ダメ」

一切の感情を出さず、淡々と最小限の言葉を返していく。それを危険信号と判断したのか、北斗が乾いた笑いを漏らし立ち上がる。

「じ、じゃあ、詳しい話はまた後で」

「はいはい。後で電話するね」

「……」

北斗が立ち去った教室で静かに見つめ会う二人。気のせいか二人の間には火花が散っている。

「どうしたの？ 難しい顔しちゃって」

「サナちゃん……まだ北斗の事……」

「あれ？ 真帆はそんな事気にしてるの？」

「そんな事って……」

「私が誰を好きになっても、真帆に口出しする権利はないよね？」

う、と言葉を詰まらせ、困惑した表情を浮かべる。

「あのあどけない表情と澄んだ瞳、誰にでも優しく振るまう人の良さ。それに」

ウツトリとした中にも、敵意をちらつかせた表情で語る沙苗。対照的に真帆の表情は曇っていく一方だ。

「そっか、サナちゃんも好きなんだ」

その真帆の力ない眩きを聞くと、何を思ったか今までの刺のある表情を崩し、満面の笑みで真帆の頭を撫で回す。

「も、本当に真帆は可愛いな」

「え？」

愛犬を愛でるようにクシヤクシヤと掻き回していく。

「冗談だよ。北斗は真帆が好きだし、真帆も北斗が好きなんだから」
「でも……」

「いやいや、正面から告白して振られたんだから、もう綺麗サツパリ、恋愛対象としての気持ちは捨ててるよ。『好き』って言うのは人間としてって意味だから」

「サナちゃん……」

「さ、詳細を決めないかね。おい、芥川」

真帆とは対照的に晴れ晴れとした表情で、教卓の前で雑談をしている大地に駆け寄っていく。それを複雑な表情で眺める真帆だった。

「さ、ついやってまいりました！ 夏の風物詩、肝試し大会

」！

「……」

一人盛り上がる沙苗の周りには、北斗、真帆、大地がなんともいえない表情で立っていた。

「なあ、なんで和泉はあんなにテンションが高いんだ？」

「さあ……。それに今さらだけど、人数少ない気が……」

「サナちゃんが誘わないでって言ってたから……」

「ほら、ごちゃごちゃ言つてないでクジを引け！」

そう言つて筒に入った四本の割り箸を、三人の前に突き出す。

「これでペアを決めるわけか？」

「そのとおり！ 決まったペアは絶対組み直さないから、心して引

くように!」

依然沙苗のハイテンションに押されながらも、三人がクジを引く。「じゃあ、『せくの!』で自分のアルファベットを言ってね。……

せくの! A!」

その掛け声に四人が揃って割り箸を差し出す。ちなみに沙苗以外は声を出していない。

「……」

「これって……」

「これは……」

「おいおい、マジかよ……」

クジによって決まったペア。それは

「ボクが大地と?」

「私はサナちゃんだね……」

しばらく石化していた沙苗が、突然引きつった笑顔に変わり、素早く割り箸を回収する。

「さあ、今のは練習で、次が本番です」

「それはオレが許さん」

束ねられた割り箸を、沙苗の数十cm上空から奪い取る。

「ああ」

玩具を取り上げられた子供のように、ピョンピョンと跳び跳ねるが、腕を上げた大地には到底届かなかった。

「自分が言ったことに責任を持つんだな」

「うう……せつかくさり気なくホクトとペアになって、騒ぎに乗じてウハウハ出来ると思ったのに……」

「ま、まあまあ、こうなったのも何かの縁かもしれないよ。今回はこのペアで楽しもう。ね?」

そう言って助けを求めるように真帆に視線を送る。

「う、うん。北斗の言う通りだよ。ね? 大地君」

お願い、と力の籠もった視線を受け、大きいため息をつき、沙苗の頭に手を置く。

「北斗と戯れるのはまた今度いいだろ？　今回は諦めるって
驚掴みにした頭をグラグラと揺する。
「分かりましたよ〜だ。……って、いつまで掴んでんだー！」

「この森林公園一周するだけだろ？　何が面白いんだか」

真帆達に遅れること二十分、北斗と大地が発発していた。

「面白くないけど、肝試しにはなるんじゃない？　真帆は大丈夫
かな」

「相変わらず過保護だな。まあ、オレには関係ないけど」

それだけ話すと、後は無言で真っ暗な公園の中を歩いていく。

「あれ？　こつちでしょ？」

ちょうど公園の角に差し掛かったところで、北斗が立ち止まる。

「ああ、肝試しの順路はそつちだが、オレ達はこつちに用がある」

「え？　ボクも？」

「そつだ。行くぞ」

そう言っただけ振り向きもせず、公園よりも更に深い闇へ歩を進め
ていく。それを少し戸惑った北斗が小走りで追い掛ける。

「こつちに何かあったっけ？」

「まあな。つーか、そんなに心配すんなって」

うん、と小さく頷く。

「よし、着いたぞ」

ようやく振り返った大地が示した場所は、古びた地蔵の前だった。

「こつこ、覚えてるか？」

「こつこ？　来たことあったっけ？」

「ああ、一度だけな」

ん〜、と小さく唸り声を上げ、辺りを見回す。しかし、それでも心当たりがないのか、困惑した表情で再び大地に向き直る。

「で、ここが何だって言うの？」

それに応える代わりに顎で小さな社の中の地蔵を示す。しばらくそれを眺めていた北斗だったが、結局首を傾げたまま唸り声を上げるだけだった。

「やっぱり覚えてないか。まあ、覚えてなくても無理はない」

「大地は何か知ってるんだよね？ 教えてよ」

「じゃあ目を瞑れ」

「目？」

不思議そうに目を閉じる北斗。

「お前にとつて大切な事を思い出させてやる」

そう言つて北斗の目を覆うように掌を近付けていった。

後編：小さな願い

暗い。

身体が動かない。

それに水中を漂う様な浮遊感。

……ああ、夢の中にいるんだ。

「ねえ、どこいくの？」

その中でアスファルトの陽炎に構うことなく、幼い少年が走っていた。

「このまえすつげーいいところみつけたんだ」

その前を走る少年。こちらも後ろを走る少年と同じくらい幼い。とにかく走る。

「ここがいいところ？」

そのまま休む間もなく到着したのは、森林の奥深くだった。

「ああ、よくみてみるよ」

「おじぞうさん？」

「そうだ。そのちかくもみてみるよ」

「あ、なんかいたがあるね」

少年が言うように、古びた地蔵の横には何枚か板が置いてある。

そのどれもが歪な形をしているが、なんとなく作りたいものが分かる気がする。

「そう、これでこのじぞうのいえをつくるんだ」

「へえ、すごいね」

「すごいね、じゃなくて、ほくともてつだうんだぞ」

え？ ほくと？

「でもボクはだいちくんみたいいきょうじゃないよ？」

だいちくん……。じゃあ、この二人って……。

いや、でも大地に出会ったのは、中学校の時にボクが引越してきたからだ。それ以前に会ってるはずは……。

「うわ、これじゃおうちなんてつくれないよ」

考えを巡らすうちに、ボク（仮）と大地（仮）は作業を始めていた。

「ばか、そんなのはここでなんとかするんだよ」

トントンと親指で自分の胸を指す。見れば見る程大地に見えてくる。

「うーん……あれ？ これどうやってくつつけるの？」

「どうやってって、くぎで……あ」

この二人、工具を何も持っていないんじゃないか……。

「のりじゃだめかな？」

「なんでのりなんてもってるんだ？」

「しゅくだけでロボットをつくったときに、ポケットにいれたままだったみたい」

「なるほど。とりあえず、それでだいじょうぶだろう」

いや無理だつて！ つて突っ込んでも無駄か……。

「あとさ、これとこれじゃおおきさがあわないよ？」

「うーん……まあ、やってみようぜ。ん？」

その時二人の背後から少女の笑い声がした。

「そんなのでおうちなんて作れるわけないじゃん」

声の発生源は悪戯っぽい表情を浮かべた少女だった。この二人と同じくらいの年かな？

「さ、さなちゃん」

その後ろからは真面目そうな少女が顔を覗かせる。今の『さなちゃん』って……。

「なんだよ、おまえたち」

「私は和泉沙苗。こっちの子は水野真帆」

やっぱり……。小さい頃の二人を見るのも初めてだな。二人ともしっかり面影がある。

でもこの二人とも会ってたのか。

いや、夢だからどうにでも構成されるのかも……。

「ふ〜ん」

「ふ〜ん、じゃないでしょ。私になまえをおしえてあげたんだから、あなたたちもおしえてよ」

「おれはあくたがわだいち」

「ボクはたきもとほくと」

「だいちとほくとね。それで、そんなへんないたでおうちを作るきななの？」

その言葉にムツとした表情を浮かべる大地。

「へんじゃない。これですげーかつこいいいえをつくるんだ」

「むりむり、もっと大きさをあわせないとね。これとかで」

そう言っただけから多少錆付いたノコギリを出す。ちっちゃいボクは恐怖のためか、口を開けたまま固まっている。我ながら情けない……。

「うわっ！ それどうしたんだ？」

「さっきあつちでひろったの。真帆が見つけたんだよね？」

「そうだけど……あぶないよ」

「だいじょうぶだ。おれがいるからな」

自信満々な大地。今も昔も変わらないなあ。

「ほくとくん、だいじょうぶ？」

ちっちゃい真帆がボクの頬を突く。そこでようやく正気に戻ったのか、何度も頷き少し震えた声をあげる。

「よし、みなでおうちをつくらう！」

なんか微笑ましいというか間抜けと言っか……。何はともあれ、四人での作業が開始した。

サナがどこから取り出した鉛筆で板に線を引き、それに合わせて大地がノコギリで切っていく。二人とも子供とは思えない技量だ。ボクと真帆はその板を組み合わせて、先程ののりでくっつけていく。本当にのりでやるとは……。でも不思議なことに、一度接着した板は剥がれなかった。なんというのりだ……。

「できたー！」

日も沈みかかった頃、ようやく四人の歡喜の声があがった。

「うは、かつこいいぜ」

四人の前には色々と歪ではあるが、小さな子供達を作ったとは思えない、きちんとした社が建てられていた。その中には地蔵がちょこんと置いてある。

心なしか、そのポーカーフェイスは嬉しそうに見える。

「これも私のせつけいのおかげね」

「なんだよ、きつたのはおれだぞ」

「ノコギリを持ってきたのも私だもん」

む、と大地がむくれる。

「まあまあ、けんかはやめようよ」

「そうだよ、みんなでがんばったんだよ」

ボクに加勢するように真帆も二人を宥める。この頃から上手い具合に役割分担されてたんだな……。

「そうだな。おつかれさま」

「おつかれさま」

握手と共に四人に笑顔が戻った。そこで何かを思いついたようにボクが目を輝かせる。

「なにかおねがいごととしてみようよ」

「お、いいな」

「どんなおねがいしようかな」

「あとでおそなえものもってこようね」

四人が目を閉じる。そして思い思いの願い事を　　え？

『これからどんなことがおこるかおしえてください』

ボクの声だ。目で見える限り口は動かしてない。頭に直接響いてくるみたいだ。これからどんなことが起こるか、か。そう言えば当時

のボクはやたら次の日の事とか、未来の事とかに興味があったな。

『未来日記』みたいなものも書いてたっけ。

『きょうのことを、ずっとわすれませんように』

続いて大地の声が聞こえてきた。今日のこと、本人は結構楽しんでたんだな。

『ほくとが私のことをどうおもってるか、おしえてください』

これはサナだ。でも何でボクの事なんて知りたいんだ？

『いつまでもほくとくんがげんきでいますように』

最後は真帆だ。今の真帆でも似たような事をお願いしそうだな。

あれ？ 急に視界が

「おゝい、起きろ」

「ん？」

目を開けると大地の顔が視界いっぱい広がっていた。

「大丈夫か？ 派手に転んだな」

「え？ 転んだ？」

いつの間にか？

……思い返してみても、転んだ覚えはない。

「本当に大丈夫か？ 明日にでも医者に行けよ」

「ん……あのさ」

色々と質問をするはずだったが、何故か口からは別の言葉が出ていた。

「あそこの地蔵、近いうちに綺麗にしてあげよう」

対する大地は口元を緩め小さく頷くだけだった。

「立てるか？」

「ん、大丈夫」

「大分時間をロスしたな。和泉が煩そうだ」

「うわ、急がないとね」

最後に古くなった社の中の地蔵を見る。

夢の中と同じように、依然として無表情だったが、それでもボクには微笑んでいるように感じられた。

「おっそい！ 何してたのよ!？」

「煩せえな。しょうがないだろ、取り込んでたんだから」

最初の集合場所に戻ると、大地の予想通りサナの雷が落ちた。寝起きにこの大声は堪える。

「おかえり、北斗」

サナと同じ時間待ったはずの真帆は、怒りは微塵も見せず、疲労と安堵が入り交じった表情で出迎えてくれた。

「ん、ただいま。心配かけちゃってごめんね」

「ううん、北斗が元気だったらそれでいいの」

『いつまでも、ほくとくんがげんきでいますように』

夢の中の幼い真帆の声が、頭の中で反響した。

「北斗？」

「あ、なんでもないよ」

「そう？ なんかスッキリした顔してるね？」

「え？」

真帆に言われて初めて気が付いた。心の中がやけにスッキリしてる。

そうだ、大切な何かを思い出したんだ。

「ありがとう」

「え？ 急にどうしたの？」

「ううん、ただお礼が言いたくて」

「変な北斗」

クスクスと笑う真帆。それに見いつていると、少し離れた場所からサナの声が響いた。

「こっちで花火やる？」

この辺は 大丈夫だ。周りに木はない広場だし、花火禁止でもない。

「花火だつて、行こう？」

今度こそ、差し出された真帆の手を握った。

後編：小さな願い（後書き）

まず、ここまで読んで頂きありがとうございます。

『夢の終わり』では盛り込む事が出来なかった、SF要素（？）の元を書きました。前作は恋愛要素が多かったらしく、不思議な事が完全に浮いてしまったので、恋愛要素はなくしたつもりでした。それでも恋愛っぽいといわれればそれまでですが……。

作者としては、読者に解釈を任せるのが理想でしたが、以下ネタバレです。

ボクが当初『バッドエンドを書きたい』と思ったときに、最初に思いついたネタがこの『小さな願い』から始まった不思議な出来事でした。単刀直入にいうと、作中の地蔵の力でそれぞれが特殊な能力を手に入れた、というのがネタです。

北斗は未来を知る、大地は記憶や出来事を知る、沙苗は北斗に対してのみ読心術、そして真帆は北斗に対してのみ治癒能力……。こうしてみると、ファンタジーな世界の魔法みたいですね。

結局地蔵の力が暴走して北斗が運命の力によって死ぬ、または瀕死になり、真帆が治癒……。もはや不思議を越えてる……。

というわけで、次に新しい小説を書く場合は魔法を題材にしてみたいと思います。

話がそれてしまいましたが、最後にもう一度感謝の意を。

最後まで読んで頂いてありがとうございました。今後もよろしくお願ひします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4754c/>

夢の終わり～After Story～

2009年3月24日10時29分発行